

(10・27民主市政の会決起集会での報告)

私の方からは、「岡崎市政とはどんな市政か」という話をさせていただきます。

みなさん、いまこそ、人を得て、「あったか市政」を実現すると絶好のチャンスであります。

岡崎市政は3期12年続いております。岡崎さんを後継下指名した、元自治省官僚の松尾さんの時代を加えると21年であります。戦後、氏原、坂本、横山と続いた「革新市政」の対極の市政が長きにわたって続いている訳であります。もうそろそろ終わりにしても良いんじゃないでしょうか。

みなさん、「日本の資本主義の父」と言われている渋沢栄一は、「論語と算盤」ということを言っております。企業経営には、「算盤勘定」だけではなく、倫理や心が必要だということを言っている訳であります。

岡崎さんは、財政課長をやっていた方です。算盤勘定が得意な方です。

しかし、みなさん、算盤勘定が優先すれば、「マンションも傾く」のであります。

ましてや、基礎自治体である高知市政は、住民の生活や命を守ることが第一の使命であります。「福祉の心」や「市民に寄り添う気持ち」がなければ、市政は傾くのであります。

さて、みなさん、岡崎市政はどのような市政でしょうか。私たちは、「あったか市政」を実現しようと言っております。

ということは、裏を返せば、岡崎市政は「冷たい市政」だということでもあります。

しかし、事はそう単純ではありません。岡崎市政は、「壊れたホットプレート」であります。即ち、あるところは温かく、あるところは冷たい訳であります。

何処があったかいか。特定勢力、特定団体、箱モノ行政にあります。

どこが冷たいか。それは、私たち市民の暮らし、特に社会的に弱い立場の人たちに、であります。

今度の市長選挙の課題は、「冷たい市政」から本当の意味での「あったか市政」への転換であります。

大きく言って争点は2つであります。

1つ目は、「ハコもの事業」優先か、それとも「生活」や「福祉」優先かということでもあります。

岡崎さんは、「財政再建をやった、やった」と言っています。しかし、やったことは3つであります。職員を減らしたこと、市民サービスを削ったこと、市民負担を増やしたこと。

職員は合併前と比べて200人削減し、職員は多くの仕事を兼務し疲れております。保育士さんの半数は臨時職員であります。国保料は、全国の中核市の中で5番目に高い水準であります。保険料が高くて払いたくても払えない世帯が、全世帯の1割以上であります。そのうち1千世帯が、保険証をもらえず、一旦窓口で10割負担しなければ、病院にも掛れない状況に置

かれています。

900名を超す高齢者が、特別養護老人ホームに入れる日を一日千秋の思いで待ち望んでおります。児童クラブの利用料、水道料金、公共施設の利用料など実に100項目以上が引き上げられました。

そして、これを計画以上にやって、財政再建を超過達成したわけであります。

本来なら「財政再建」は評価しないといけない。しかし、この中味ですからとても評価できるものではありません。岡崎さんがやった財政再建は、市民の負担と犠牲と我慢の塊であります。本来その「果実」は、市民に還元するのが筋であります。

しかし、それを再び「ハコもの事業」につぎ込もうというのが今現在の岡崎市政であります。

空地を見たら建物を建てたくなる。古い建物を見たら、壊して更地にし、やっぱり何かを建てたくなる。できれば、大きなものにしたい。このDNAは、後継指名を受けた松尾市政から受け継いだものであります。

その典型が、新庁舎の建設であります。古くなった庁舎は建て替えなければなりません。しかし、その規模と額が問題であります。

当初90億円であったものが、ふくれにふくれて、いまや180億円であります。

新庁舎建設に伴い、老朽化した南庁舎は取り壊し更地にする計画でした。ところが、「福祉会館」を建てると言い出した。福祉という名前がついているものの、やっぱり「箱もの」であります。

そして最大の無駄使いであり疑惑が付いて回るのが、桂浜のいわゆる「道のない『道の駅』」構想であります。桂浜観光は、高知市観光にとって目玉であります。老朽化した土産物店などの再整備は必要です。

ところがそこから数キロ離れた山の上に「道の駅」を作るというのであります。そこは、県道14号線から細い道を入った現在ゴルフ場があるところでもあります。そこに、山の尾根に道を造り、山の上で「海産物」を売るという摩訶不思議な計画であります。

100億円規模の事業だと言われております。その土地の9割を、特定業者が所有していると言われる、疑惑まみれの計画であります。

「壊れたホットプレート」が、異常に加熱している部分であります。

今度の市長選挙のもう1つの争点は、市長の「リーダーシップ」の問題であります。

「市民の意見を聞かず、トップダウンで進める市政」なのか、「市民の要求に耳を傾ける市政」なのかが問われています。

皆さん、政策は天から降ってくるもの、即ち東京の官僚が頭の中で考えるものと思っではないでしょうか。この立場からすれば、その官僚と価値観を共有し、その仕組みに精通する者こそが、政策通であり、市民生活にプラスになる政治家ということになる訳であります。

しかし、これは戦後日本人が刷り込まれた「最大の誤謬」であります。

政策は、私たち市民一人一人の暮らしの中、生活の中にある「要求」にこそあるのでありま

す。商店街で店を営む一軒一軒、中小企業を経営し、そこで働く労働者の生活の中にこそあるのです。その要求に耳を傾け、実現しようとする試みから政策が生まれる訳であります。

森あつこさんは、「あったか懇談会」を小学校区単位で無数に開き、市長室の扉は、市民に向けて開放する、と言っています。

「あったか懇談会」は手段であります。「あったか市政」の実現は目標であります。そして、市民の暮らしや生活、営業の安定が目的であります。

さて、みなさん、前回の市長選挙の投票率、28%。これでは民主主義が死んでしまいます。あの戦争法反対の闘いの中で、民主主義を求め、「自分たちの未来は自分たちで決める」と若者が立ち上がりました。若いママさんたちが、「うちの子もよその子も戦争にはやらない」と立地拳がりました。再び、日の丸の旗を振って我が子を戦場に送り出す日が来るのではないかという、危惧の念が広がっています。

愛媛の中村知事が昨日再稼働容認を発表しました。高知の尾崎知事も容認しました。

伊方原発再稼働の危険性が目の前です。福島の子どもたちは、「甲状腺がん」で苦しんでおります。

この政治に向けられた思いを、この身近な高知市政にも向けていただき、みんなの力で「あったか市政」を実現しようではありませんか。

年金が減らされ、消費う税が引き上げられ、医療費や介護の負担が増える中で、「生活を切り詰め、ひっそりと暮らす」ことが、生活の知恵、人生の知恵だと思ってこられた高齢者の方が、多くおられます。

生き辛さを感じながら、非正規であるのは自分の性だと自己を責める多くの青年がいます。

声を上げていいんだ、政治に要求してもいいんだ、と思ってもらえる「市政」を実現しようではありませんか。

声を上げること、政治を変えることこそが、「人生最大の知恵」であります。

9月19日に戦争法が強行されました。この日は、「日本の民主主義が死んだ日」であります。しかし、私たちがあきらめない限り「新たな民主主義が産声を上げた日」にすることができます。

今度の市長選挙は、その延長線上にある選挙であります。戦争法が成立して初めて、この高知市で闘われる選挙であります。

「あったか市政」を実現しようではありませんか。